

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「かのこちゃんの親友のすずちゃんは、お父さんの仕事の都合で転校することになった。三日前の日曜日、かのこちゃんとすずちゃんはお別れを前に、二人でお祭りを楽しんだ。」

お別れ会の当日、かのこちゃんは学校ですずちゃんとあまり話ができなかった。

すずちゃんも、「まだ下の歯がぬけないの」と朝礼帰りのろう下で告げて以降、一日中クラスメイトへの対応にかかり①きりで、お別れ会でも主役として壇上の席にすわり続けたため、二人でようやくゆつくり話ができたのは学校が終わってからのことだった。すずちゃんの家は学校をはさんでかのこちゃんの家とは正反対の位置にあるけれど、ランドセルを並べ、すずちゃんを家まで送った。

今夜はこれから空港近くのホテルに向かいそこで一泊して、明日朝の飛行機に乗るのだとすずちゃんは言った。すずちゃんは依然ぬける寸前だという下の歯の様子を気にしていた。同じくかのこちゃんも、いよいよぐらぐらしてきた下の歯を舌でさぐりながら、

「歯がぬけるときの、あのめりめりってすごい音は何だろうね」と問いかけた。

「歯が肉からはなれる音じゃないかな」

「それであんなすごい音がするのかな? 何だか骨が裂けるような音がしない?」

「でも、きつと他の人には聞こえないんだよ」

「そうなのかなあ」

「歯がぬける寸前の、あの痛いようなかゆいような感じが本当に苦手」

とすずちゃんはあと少しでぬけるのに最後の一押しがこわくてできない、とわが身の勇気のなさを訴えた。

「お母さんが歯に糸をくくりつけて、ドアノブに結んで、一気にドアを開けたらすぐぬけるって言ってたよ」

冗談に聞えなかったのか、② すずちゃんの顔が急にこわばるのに気づいて、

「歯がぬけたあとに舌をつつ込むと、深い穴が空いていてびっくりするよね」

とかのこちゃんはあわてて言葉を接いだ。

「でも、新しい歯がその奥おくに少し出ているとうれしい」

と相変わらず、くちびるの向こうで舌をもごもごさせながらすずちゃんはずいぶんうなずいた。

すずちゃんの家の屋根が道の前に見えてきても、かのこちゃんは明日からのことを何もたずねなかった。

すずちゃんも明日からのことをひと言も口にしなかった。

結局、すずちゃんとは歯の話をしただけで、玄関前まで到着してしまった。これですずちゃんと本当にお別れかと思うと、どこ

かあつけないような、とても③ もつたいのないような気がしたけれど、お祭りの日に、泣かないでお別れしよう、と約束したことは最後まで守りたいと思うかのこちゃんだった。

すずちゃんはいったん玄関に入って、ランドセルを置くふたたび出てきた。

「元気でね、かのこちゃん」

「うん、すずちゃんも」

そのとき、④ すずちゃんは「あ」という顔をして、大きく目を見開いた。「どうしたの」とかのこちゃんが声をかけるよりも早く、すずちゃんはいきなり背中を向けると、「またね」と玄関ドアを開けそのまま姿を消してしまっ

た。音を立てて閉じられたドアの前で、かのこちゃんはぼう然と立ち尽くした。

まだお別れの途中とちゆうのはずとすずちゃんの再登場を待ったが、五分経たつてもドアはびくとも動かない。

どうやらお別れの時間は終わってしまったらしい。

最後の言葉が「またね」というのも、どこまでもすずちゃんらしいといえはすずちゃんらしかったが、⑤ 何だか別の意味で泣き

たくなる気持ちがかみ上げてきて、かのこちゃんはランドセルを乱暴にかつき直し、ドアに背を向けた。

どうしてすずちゃんはいつもこうなんだろう、と今さらながら恨み節を連れ、来た道を戻ろうとしたとき、

「かのこちゃん！」

と急に頭の上から声が降ってきた。

驚いて首をねじると、二階の物干し台から、すずちゃんが手を振っていた。

「ぬけた！」

「え？」

「お別れを言おうとしたら、いきなり口の中に何かが転がって、舌で確かめたら歯だった！ ぬけた歯の裏側って、崖みたいですよ」
「ごく変な感じ」

すずちゃんは手すり越しに、腕をつき出した。指の間に何となく白いものが見えたが、それよりも笑顔の真ん中のぞく、ぽっかり空いた黒いすき間が何より事実を伝えていた。

「よかったね！」

「ありがとう。でも、ちょっと血の味が気持ちわるい」

「でも——⑥ どうして物干しに上がったの？」

すずちゃんは「え」と一瞬驚いた表情を見せたあと、こうするのにつき出した腕を下から振り上げた。

「いい歯になりますように！」

白い影が物干しの屋根の上へ飛んで、音もなく消えた。

思いもしないすずちゃんの行動に、かのこちゃんはポカンと口を開け、歯が消えた空を見上げた。

「知らない？」

「え？」

「下の歯がぬけたら屋根の上に、上の歯がぬけたら縁の下に放ると、次にじょうぶな歯が生えてくるんだよ」

いまだ驚きさめぬ表情のまま、かのこちゃんは首を横に振った。かのこちゃんのぬけた歯は、へその緒がしまつてある木の箱と
いっしょにお母さんが一つ一つ大切に保管しているのだ。

「今度、やつてみたら？」

「うん、試してみるかも」

舌で歯を押し、ぐらぐらのあとに訪れる鈍い痛みを確かめながら、かのこちゃんはずいいた。

ふと静寂が訪れて、二人は無言で見つめ合った。

「さらばでござる」

物干しから、すずちゃんはおごそかに告げた。

そういえば、お祭りでおとなのお別れしようと約束したことを思い出し、

「さらばでござる」

とかのこちゃんも重厚に応じた。

「これまで楽しかったでござる、かのこどの」

「拙者も楽しかったでござる。達者でな——すずどの」

「宿題の期限は守るでござるぞ、かのこどの」

「牛乳の気飲みはほどほどにするでござるぞ、すずどの」

すずちゃんを見上げていると、急に鼻の奥がツンとして、目の下のあたりが変にじりじりしてきた。「じゃあね」と手を振って、
かのこちゃんは顔を伏せた。そのまま、家に向かって早足で歩き始めた。

しばらく進んだところで振り返ると、すずちゃんは手すりから上半身を乗り出すようにして、ふとんたたきを高らかと振り上げていた。

「ずっと注^{ふんけい} 刎頸の友でござる、すずちゃん！」

「さらば、かのこちゃん！」

「さらば、すずちゃん！」

震^{ふる}えているすずちゃんの声に、せいっぱい腕を振って応え、かのこちゃんはふたたび歩き始めた。

それきり二度と振り返らなかった。なぜなら、そこで振り返ったらすずちゃんとの約束を破ってしまったことが、簡単にバレてしまうからである。

『かのこちゃんとマドレーヌ夫人』万城目学

注 刎頸の友・・・親友。

問一 ——部①「きり」と同じ意味で使われているものを、次のア～オの……部の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人に聞かれないように二人きりで話そう。 イ 問題を挙げているときりがない。

ウ 彼女とはそれきり会ってない。 エ きりがいいところで一休みしよう。

オ 母がつききりで祖父の看病をしている。

問二 ——部②「すずちゃんの顔が急にこわばる」とは、「すずちゃん」のどのような様子を表しているか。最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア かのこちゃんを気づかかって、必死に笑顔をつくろうとしている様子。

イ 自宅の屋根が道の先に見えてきて、別れが近いことに気づいた様子。

ウ 下の歯を舌でさぐりすぎて、今にもぬけそうになって驚いた様子。

エ 歯がぬけるのがこわいので、ぬけたときの痛みを想像した様子。

オ かのこちゃんが無神経なことを言うので、むっとしている様子。

問三 ——部③「もつたいたいような気がした」とあるが、このときの「かのこちゃん」の気持ちとして、最も適当なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア 不安に思う気持ち。 イ 名ごりおいしい気持ち。 ウ 腹が立つ気持ち。

エ 申し訳ないという気持ち。 オ ありがたい気持ち。

問四 ——部④「すずちゃんは『あ』という顔をして、大きく目を見開いた」とあるが、「すずちゃん」に何が起きたのか。簡単に

説明しなさい。

問五 — 部⑤ 「何だか別の意味で泣きたくなる気持ち」とあるが、ここでの「かのこちゃん」の気持ちとして、最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すずちゃんにわざと「またね」と簡単に言ったやさしさに気づき、心があたたかくなって泣きたくなる気持ち。

イ すずちゃんの思いがけない別れ方に驚き、悲しさがどんどんこみ上げてきて泣きたくなる気持ち。

ウ すずちゃんがきちんと別れの言葉を言うことなく去ったことを情けなく思い、泣きたくなる気持ち。

エ すずちゃんが急にいなくなり、ひとりぼっちでこれからどうしていいのかわからず、泣きたくなる気持ち。

オ すずちゃんと楽しく過ごした日々を一つずつ思い返し、改めて出会えたことをうれしく思い、泣きたくなる気持ち。

問六 — 部⑥ 「どうして物干しに上がったの？」とあるが、「すずちゃん」はなぜ物干しに上がったのか。その理由を、文中の言葉を使って三十五字以内で書きなさい。（句読点は字数に入れません。）

問七 — 部⑦ 「おとなのお別れしよう」と約束した」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「かのこちゃん」と「すずちゃん」は具体的にどのような約束をしたのか。解答らんに合うように、文中から十一文字でぬき出しなさい。（句読点は字数に入れません。）

(2) 二人の約束は守られたのか、守られなかったのかを、理由を明らかにして書きなさい。

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

① 人間の祖先がどこからきたのかという疑問は、ずっと昔の人たちも考えていたことでした。事実、世界中のどの民族にも、その疑問に答える神話があります。そのほとんどは、神様が人間をおつくりになったという話です。

現在の地球上で見られるさまざまな生物が、^{注1}進化によって生まれてきたという考えを多くの人たちがなつとくするような科学的な理論として初めてまとめたのが、イギリスのチャールズ・ダーウィンでした。ダーウィンは、一八五九年に有名な『種の起源』という本を出版しています。

その当時のイギリスでは、ほとんどの人が、キリスト教の聖書がいうままに、神様が人間をおつくりになったと信じていました。ダーウィンはとても注意深い人だったので、人びとから無用な反発をかうのをおそれて、『種の起源』のなかでは、生物の進化についてくわしく述べているにもかかわらず、①ヒトの起源については何も論じませんでした。本の最後に、「将来、人間の起源と歴史に対して、多くの光が投げかけられるであろう」と一言だけ述べているだけです。

しかしながら、この本の読者には、ダーウィンの考えがみてとれました。ダーウィンがヒトもほかの生物と同じように進化によって生まれてきたものである、と考えていることが、だれの目にも明らかだったのです。ダーウィンの説を認めるといことは、ヒトとサルの祖先が同じであることを認めることになります。ですから『種の起源』が出版されるとすぐに、ダーウィンはもうれつな批判をあびました。有名な動物学者であったリチャード・オーウェンは「ダーウィンの進化論によれば、ヒトとサルが親類だということになるが、そんなバカなことがあつてたまるか」といかりました。そうして、ダーウィンに対する感情的な非難を、ことあることにくりかえしたのです。

進化論に対する批判があまりに激しいので、ダーウィンも、「自分の説が人びとに理解されるには、生物が進化するのとあまり変わらないほど時間がかかりそうだ」と言っていました。もちろん、ダーウィンは自分の説が正しいことに自信をもっていました。その自信はかれを批判する宗教家の②それとは異なったものでした。

ダーウィンは、進化の考えが世間であるていど受け入れられるようになった一八七一年になってはじめて、ヒトの進化の問題を真正面から取り上げた本『人間の由来』を書きました。その本のあとがきで、ダーウィンは次のように述べています。

将来、私の考えがまちがいであることがわかるかもしれない。ゆがめられた事実というものは、あとに長く尾を引くことが多いから、科学の進歩をひどくさまたげるものである。③、まちがった考えでも、それを支持する何かの証拠しやうこがある場合には、ほとんど害がない。④、その誤りを誤りとして証明することに、喜びをいだかない人はいないからである。そしてこういうことが証明されれば、誤りに向かう一つの道がとぎされると同時に、真理への道が開かれることが多いのである。

⑤ダーウィンの態度は、それに反対した宗教家たちの態度とはずいぶんちがいます。宗教家は、神様が人間をおつくりになつたことを、絶対に正しいこととして信じなさいと言います。そこには、どのような事実が明らかになっても、自分の信じていることを考えなおす余地などありません。それに対して、ダーウィンの態度は科学者のものです。科学にとっては、事実がどのようなものであるかが、いちばん大事なのです。

科学の進歩は、それまで正しいと思われていたものが、そうでないとわかることによって起こります。科学の説はいつも仮のもので、そのことを仮説といいます。どんなにすぐれた説であっても、かならずいつかはその説に合わない事実が現れます。そのような事実もふくめて説明できるような新しい説が現れることによって、科学は一步步つ進んでいくのです。

君たちのなかには、科学が絶対的に正しくなくて困ると思う人がいるかもしれませんね。いつか、まちがいが明らかになるような科学なら、勉強してもしょうがない、と考えるかもしれません。しかし、私の考えはちがいます。

天文学者のコペルニクスは、それまで人びとが信じていた天動説にかわって、地動説をとなえました。それまでは、地球が宇宙の中心と考えられていたのですが、コペルニクスはいろいろと研究していくうちに、地球ではなく太陽が宇宙の中心であって、地球はその周りを回っていると考えるほうが正しいと思ったのです。

しかし現在では、太陽は銀河系にあるたくさん注2の恒星のひとつにすぎず、その銀河系さえも宇宙にたくさんある同じような恒星の集団のひとつにすぎないことがわかっています。ですから、太陽を宇宙の中心だとするコペルニクスの説は、まちがっていたということになります。

太陽でさえも宇宙の中心ではないとすると、コペルニクスの仕事は無意味だったのでしょうか。もちろん、けっしてそんなことはありません。むしろ、科学の歴史のなかでもっとも重要なもののひとつなのです。けっして完全なものではなかったけれども、コペルニクスの地動説があつてはじめて、そのあとの天文学の発展が可能だったのです。科学的な天文学の基礎きそを築いたといつてもいいでしょう。

この世界はあまりにも複雑で、私たち人間がそれを完全に理解することはできないかもしれません。しかし、だからこそ、人類の歴史が続くかぎり、科学は永久に進歩し続けることでしょう。私たちにできることは、科学の進歩の確実な一歩を手助けすることです。科学は信じるものではなく、さまざまな事実を明らかにすることによって、限りなく進んでいくものなのです。

『遺伝子が語る君たちの祖先』長谷川政美

注1 進化・・・長い年月のあいだに、生物が変化し、発達すること。

注2 恒星・・・自ら光を出し、ほとんど位置が変わらない星。

問一 ――部①「ヒトの起源」について、次の問に答えなさい。

(1) 「ヒトの起源」について、この当時のイギリスの人たちが信じていたことを、文中から十五字以内でぬき出しなさい。

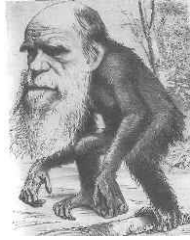
(句読点は字数に入れません。)

(2) ダーウィンは『種の起源』のなかでは何も論じていないが、「ヒトの起源」についてどのように考えていたのか。それが書いてある部分を文中から三十五字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 次の絵は、『種の起源』が出版された後、イギリスの雑誌にのったダーウィンをからかう漫画である。ダーウィンのからだを

サル(サル)の姿にえがいている理由を、次の三語を使つて説明しなさい。

「ダーウィン ・ ヒト ・ サル」



問三 ――部②「それ」の指す内容を文中からぬき出しなさい。

問四 部③・④に当てはまる最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかも イ しかし ウ ところで エ だから オ なぜなら

問五 ――部⑤「ダーウインの態度は、それに反対した宗教家たちの態度とはずいぶんちがいます」とあるが、ダーウインと宗教家たちの態度について説明した次の文の□部A・Bに当てはまる言葉をそれぞれ文中からぬき出しなさい。

宗教家は、神様が人間をおつくりになったことを□Aことと信じて疑わない。一方ダーウインは、□Bをいちばん大事にしていて、将来自分の考えがまちがいであるとわかるかもしれないと考えている。

問六 文中の*印の部分にあげられているコペルニクスについての話によって、筆者はどのようなことを言いたいのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア コペルニクスの説はまちがいが明らかになっても、その後の学問の発展に大きく役立つものであったということ。
- イ コペルニクスの説のように完全でないものはいずれまちがいが明らかになれば、新しい説にとつてかわられるということ。
- ウ コペルニクスの、太陽が宇宙の中心であるという説はまちがいであったことが、現在では明らかになっているということ。
- エ コペルニクスの説のように将来まちがいが明らかになるような科学なら、勉強する意味はないということ。

問七 この文章を二つに分け、□1・□2にそれぞれ見出しをつけるとする。見出しとして最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- 1 ア 科学と宗教 イ 世界の神話 ウ 人間の歴史 エ ダーウインの苦しみ
- 2 ア 科学は常に批判される イ 科学はまちがいを認める
- ウ 科学は絶対的に正しい エ 科学は信じることから道が開ける

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——部のカタカナの言葉を漢字に直しなさい。

- ① デパートのキキンゾク売り場。
- ② 父はケイサツシヨで働いている。
- ③ 客間にシヨウチクバイの絵をかざる。
- ④ ドウメイコクとして協力する。
- ⑤ ヒジヨウシキなふるまいをする。

問二 次の①～⑤の（ ）部の漢字に同じ漢字を書き加えると、意味の通る文になる。例にならって、その書き加える漢字を書きなさい。

〈例〉(子) 調な売れ行き。

良い(次) 勢で座る。

(答) 女

- ① 会場を(安) 内する。 道路を(黄) 断する。
- ② (立) 楽会で合奏をする。 敵しい残(者) が続く。
- ③ 体を安(争) にする。 乗りこし料金を(米) 算する。
- ④ 川底で(石) 金を発見する。 公園を散(止) する。
- ⑤ ピアノの練(白) をする。 (立) 年、中学校に入学する。